



● 光沢の無い面

図5 米山(2) 遺跡出土品 上段の集合写真と下段左上3点は第12号流路、他は第11号流路



大岩

お舎利島

今別町褒月の海岸



褒月の舎利母石『雲根誌』より



褒月の大岩付近の凹凸のある玉髄



褒月漁港東側の玉髄



外ヶ浜町三厩の元宇鉄川河口付近



元宇鉄川の玉髄(中央)と緑色凝灰岩の小礫(左)



七里長浜 右上は白神山地



風合瀬海岸の玉髄(小礫多数)

図6 津軽半島北部から西津軽の玉髄



## 「続縄文」に関するノート

木村 高\*

### 1. はじめに

北海道と東北地方北部では弥生時代以降も「縄文の多い土器の型式が続いている」(山内1939)。この現象に着眼した山内清男(1939)は「続縄文」という概念を創出し、土器の特徴の中に東北地方中部以南とは異なる文化の存在を予察した。

弥生時代中期後葉以降の東北地方北部を考える上で、「続縄文」の概念は不可欠である。しかしこの用語を適切に扱うのは意外に難しい。それは「続縄文文化」の中心が北海道にあり、東北地方北部に存在したのは「続縄文文化の要素」に過ぎないためである。

藤本強による「「ボカシ」の地帯」(藤本強1988)という表現は、東北地方北部の文化様相を感覚的に理解する上では優れたものであるが、北海道の続縄文文化に対置させるには均衡がとれないのが難点である。弥生時代中期後葉～古墳時代の東北地方北部の文化を北海道の続縄文文化に対置させるかたちで把握するには弥生文化、古墳文化、そして続縄文文化の概念の整理が前提である。本稿に掲載した「表1 山内清男による「続縄文」」と「表2 辞書に記載された「続縄文」」は、この整理過程で集まったものを抄出したものである。

### 2. 山内清男による「続縄文」(表1)

1939(昭和14)年までの記述をみると、「続縄文」は基本的に「縄文の多い土器」に由来していることが分かる。狩猟・漁労の生活様式云々が「続縄文」であるという捉え方は記されていない点に注意したい。なお、「続縄文」の用語は、1933(昭和8)年の「日本遠古之文化 七 一四、縄紋式以後(完)ー」『ドルメン』第2巻第2号が初出であるとの記載例は多いが、この文献の中に「続縄文」の用語は未だ登場していない。筆者の調査によれば、1936(昭和11)年の「考古学の正道ー喜田博士に呈すー」『ミネルヴァ』第1巻第6号(P39)が初出<sup>1)</sup>であり、「続縄文」についての具体的説明は1939(昭和14)年の『日本遠古之文化 補註付・新版』<sup>2)</sup>で初めて行われる。

1964(昭和39)年になると「狩猟民」、「狩猟採集」の概念が加わるようになる。田舎館から出土した「米」が存在しても「続縄文とみるべき」とし、「縦の縄文」が北陸に出土している点より、「北方系」の広域分布を重視している。また、十和田式を絡めながら続縄文土器から擦文土器への変遷を考えようとしており、長期・広域の中に「続縄文」を位置づけようと試みている。ただしこの段階においても我々が用いる「続縄文文化」、「続縄文時代」などの用語は全く登場していない。

1969(昭和44)年は山内が逝去する前年にあたる。「続縄文」に関する最後の記述となるこの文献のなかで初めて「続縄文式」に「文化」をつけて用いている。ただしこれは、「わたくしが「続縄文式文化」とよんだ(昭和12年)」というように、自著を引用しているものである。昭和12年の山内の著述には一通り目を通して見たが、結局のところ「続縄文式文化」の記載を探し出すことはできなかった。

\*青森県埋蔵文化財調査センター

「文化」という用語の使用に慎重だった山内がどのように定義づけを試みたのか、興味あるところではあったが、残念ながら今のところ、山内の記述の中に「続縄文式文化」の説明を見出すことができない。識者からのご教示を仰ぐことができれば幸いである。

1969(昭和44)年の記述で画期的であるのは、「続縄文式期」は二期に分かれ、第一期は内地の弥

表1 山内清男による「続縄文」 ※「江別式」は現在、「後北式」と呼称される場合が多い。

発 表 年	記 述 ・ 発 言 の 内 容	文 献
1933 (昭和8年)	「東北では亀ヶ岡式土器の後に、その伝統を持った、縄紋の多い土器型式が続いて居る。陸奥では田舎館村の土器の様な仲間がこれである。北海道にもこの仲間と似寄った型式がある。室蘭市本輪西貝塚貝層上部の土器はこの式である。」	1
1936 (昭和11年)	「日本縄文式には石鏃が一般的であって、各地方、各時期を通じて見られる。又弥生式に於いても同様であり、北海道に於ける続縄紋式又は以後にも石鏃がある。」	2
1936 (昭和11年)	「北海道の縄紋式以後のクロノロジイを樹立することが必要…(中略)…縄紋式の後にも、縄紋を持った土器型式が相当続いて居る。そしてその縄紋は…(中略)…主に縦に走る特殊なもの…(中略)…二つ以上の細別を認め得る…(中略)…私は仮にこの仲間を続縄紋式と云はうかと思つて居ます。東北にも同じ階段のものがあつます。」【座談会での発言】	3
1939 (昭和14年)	「44 北海道では縄文式以後にも縄文の多い土器の型式が続いている。この式を近年私は続縄紋式と云つて居り、若干の型式に細分し得る様である。その古いものは本輪西貝塚の土器の如きものであつて、近縁のものは陸奥、(本文中に記した田舎館村の土器等)羽後方面にまで見られ、中央部日本の弥生式と並行すべきものである。新しい方の区分は近年江別式と云はれ、…(中略)…この式に近似する土器は陸奥にもあるらしく、これが果たして中央日本の弥生式に並行するか、古墳時代に並行するか興味深い」	4
1964 (昭和39年)	「縄文式文化は一応各地一様に大差なく終る…(中略)…内地では後に弥生式、古墳時代、歴史時代に通ずる日本文化圏…(中略)…北海道中心の地方は…(中略)…続縄文、擦文土器、オホーツク式土器の文化等が続き、…(中略)…この北方文化は…(中略)…狩猟民の文化であり、また縄文式からの伝統がないとはいえない」	5
1964 (昭和39年)	「北海道には…(中略)…次に続縄文式に移行…(中略)…一貫して特有な縄文が続いている。条の走行が斜行せず、古い方の式では上下に走り、新しい方の式では任意の方向に走る…(中略)…生活状態は、縄文式と同様、狩猟採集…(中略)…米は田舎館で発見されており、その土器には弥生式からの影響もあるが、なお続縄文と見るべき部分を多分に持っている。青森県ばかりでなく秋田県や岩手県にも続縄文が主で、…(中略)…東北北部地方は、北海道と同様続縄文式が主体であつて、それに弥生式または弥生式的な文物を多少摂取したもの…(中略)…条が縦に走る縄文は広く東北各地に点々として分布している。…(中略)…新潟県、富山県、石川県の弥生式のある種のものに伴つて同様の縦の縄文が少数件出し、全く異物の如き感を与えている。これらは北方系の特徴」	6
1964 (昭和39年)	「擦文土器と続縄文土器との間には他にも若干の型式があるものと思われる。口頸部に外からの刺突文の列を有する仲間もそれで、私はかつて本輪西貝塚の表土で見たが、これは伊東氏の「樺太土器系列に於ける「十和田式」に見られ、相当すると思われる。続縄文と擦文の間には間隙があるといつてもよいし、これらを類擦文と考えてもよいであろう。」	7
1969 (昭和44年)	「内地が弥生文化に変化するころになると、全道は、わたくしが「続縄文式文化」とよんだ(昭和12年)、一連の文化におおわれるようになる。土器その他の文物は、ほとんど縄文式の継続発達したもので、とくに貝塚がめだち、…(中略)…漁労関係の遺物がふえる。内地は稲がつくられ農業が一般化しているのに、全道ではその痕跡がなく、高度の漁労狩猟民としての生活…(中略)…東北北部は…(中略)…文化の北上、南下の接点…(中略)…「北奥」地方は依然として続縄文式的であり、より北海道的と考えざるをえない…(中略)…「続縄文式期」は二期に分かれ、第一期は内地の弥生式と並行し、第二期は古墳時代に相当…(中略)…第二期は二、三の段階に分かれて、江別式土器が古く、つぎに北大式…(中略)…江別式土器は…(中略)…青森県、岩手県北部に発見される。それより南の岩手南部、宮城、山形などには破片となつて古墳時代の土師器とともに出土…(中略)…まえに「続縄文式」第一期の北海道的特徴を備えたものが、一部東北、北陸の弥生式にはいりこんだと述べたが、こんどは、第二期江別式では、東北北部を占居して、その南では古墳時代の土師器の古い部分(筆者が塩釜港で採集したものを標式とする)とふれあい、その状態が古墳時代中期以後までつづく」	8
1971 (昭和46年)	「やはりそれは内地から発生したもので北海道の渡島半島と、砂沢あたりで発生したものではないでしょうか。」【1969年のインタビュー発言】 ※山内の「それ」は、インタビュアーの平山が言った「恵山式などにみられる続縄文」を指しているものと思われる。	9